

### 日本の象徴としての世界文化資産の富士山資料

富士吉田市立図書館編

富士山は、昔から信仰の山としてまた日本を象徴する山として、いつも日本人の心にあります。

日本の象徴の山、富士山の麓にある富士吉田市立図書館では、富士山の美しい風景などの写真集や富士山信仰にまつわる資料また、富士山と関連の深い地元地域の祭りごとや風習に関する興味深い文献など幅広く収集しております。

また、本市にはもっと詳しく深く富士山をお知りになりたい方のために、“ふじさんミュージアム”があり、図書館の図書だけでは分からない富士山の魅力を施設見学や学芸員の説明などでさらに発見できます。

市立図書館では、“図書館らしくない”をキーワードに、地域のコミュニティーの場としての各種イベントを開催していきますので、ぜひ図書館へお立ち寄りください。

(富士吉田市立図書館館長 真田 武)



富士山コーナー「富士を知る」



地域の民俗資料

図書館ボランティアの日常から



受付の様子。本のことや近況などお話ししながら。

戻ってきた本を配架。高い所は梯子を使います。

### Vol.4 書庫当番の日

当館では毎月第2・第4木曜日の13時～17時、地下書庫を開放しており、その受付や配架作業を協力員が担当しています。書庫当番には本好きの方が多く、「普段見られない本に沢山触れられて楽しい」と、書庫内を探検しながら作業を楽しんでいます。最近利用者が少ないので、もっと多くの方に活用してほしいとのこと。たくさんの方が待っています、皆さまぜひ、地下書庫開放日をご利用くださいね。



YAMANASHI PREFECTURAL LIBRARY

山梨県立図書館報 147 2020.4.1 発行

### 2年目のモグラもち

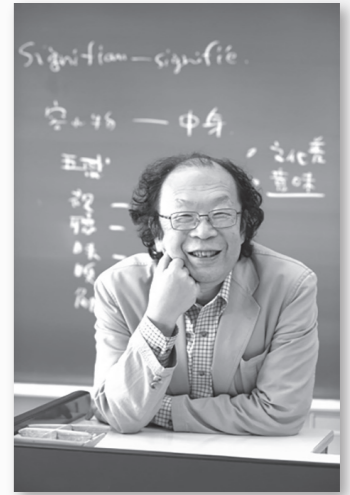
館長コラム

甲府の図書館へ来るようになって二年目を迎えます。相変わらず、モグラもちのように、月二回、山梨のおいしい水と空気を吸いに出ています。

二年目を無事に過ごせたと言いたいところですが、実は秋、入退院騒ぎを繰り返しました。いくつか催し物の予定があったのですが、幸か不幸か、ちょうどその時に大嵐が来ていて、講演会は、私の体調のせいではなく、台風のせいで中止になりました。

ベッドの上で考えましたが、それにしても図書館の仕事は責任重大。先人たちの積み上げた膨大な知恵をしっかりと受け止める。そうしてそれを後世にきちんと渡していく。大切な伝統と柔軟な革新。人はそのために生きていると言っても過言ではない、地味ですが、人類の文化を継承する、人間的な仕事です。

モグラもちですが、応援よろしくお願いします。



撮影/タカオカ邦彦

金田 秀徳

### Information 2020年度これからのイベント

5月5日(火) こどもの日のための 腹話術とパペットショー

子どもから大人まで皆と一緒に楽しみましょう。パペットを動かすワークショップではパペット貸し出しもあります。

5月20日(水) かいぶらり いろどりものがたり朗読会

アナウンサーやDJ等、声のプロが所属するボイスルームが毎回テーマを決めてお届けする朗読会。ぜひ間近で味わってください。

6月14日(日) シネマかいぶらりホリデー上映会 『若草物語』

南北戦争時代のアメリカを舞台に、温かい母親と力を合わせ、つつましくも明るい日々を過ごす4姉妹の暮らしを描いた物語。

8月3日(月) かいぶらり 司法書士無料相談会

山梨県司法書士会による相談会。相続や、売買による登記、遺言、老後の財産管理など、ジャンルを問わずお気軽にお話しください。



山梨県立図書館報 読書山梨147号 発行日 2020年4月1日

発行:山梨県立図書館(かいぶらり) 〒400-0024 甲府市北口2丁目8番1号 TEL:055-255-1040(代表) 255-1041(施設予約) FAX:055-255-1042 URL https://www.lib.pref.yamanashi.jp/ E-mail ken-tosho@lib.pref.yamanashi.jp

### 本と人をつなぐ

#### 第4回 LLブック



図書館は誰にでもその必要とする情報を提供する役割があります。通常の本をそのまま使えない方のために様々な本が作られ、当館でも積極的に収集しています。

スウェーデン発祥の「LL(Lättläst)ブック」は易しい文章と図等を使ってわかりやすく書かれた本で、知的障害や失語症の方、日本語を母語としない方等にとって、自ら読み、生活に必要な情報を得るために有効な資料と考えられています。

当館では、資料の存在を広く知っていただくため通常の書架に並んでいます。

当館ホームページにLLブックの一覧があります。 https://www.lib.pref.yamanashi.jp/handicapped/

\\ 事業報告ピックアップ //

2019年度下半期

11/24

「贈りたい本大賞」表彰式、  
なかにし礼氏講演会&金田一館長とのトークショー



ラジオ深夜便での共通の思い出や言葉について、軽妙なトークが弾んでいました。  
表彰式での記念写真

令和元年度 贈りたい本大賞

- 大賞** わたしのおばあちゃんへ『パンのずかん』古屋瑠佳さん(駿台甲府小) 体の不自由なばあちゃんに 『旅するウサギ』森田大智さん(山梨大学教育学部附属中) 水木さんを知らない人へ『ねぼけ人生』興水奏羽さん(甲府東高) 中学校生活を頑張っている妹へ『盲導犬不合格物語』丹澤美樹さん(市川高) つまずいたと感じた貴方へ 『世界から猫が消えたなら』鎌田涼さん(甲府商科専門学校)
- 学校賞** 金田一秀穂賞 北杜高 山城小 駿台甲府小 竜王北中 田富中 葦崎工業高 甲府昭和高中 市川高 上野原高 自然学園高

新館開館7年目の令和元年11月24日(日)に「第6回贈りたい本大賞表彰式」を行いました。6歳から81歳まで6,018点の応募の中から「大賞」受賞者(5名)と「学校賞」(10校)を表彰し、「学校賞」の中でも特に積極的に特色ある取組を行った学校(1校)には「金田一秀穂館長賞」として、館長より賞状と直筆の色紙を授与しました。

表彰式後は、「なかにし礼氏講演会&金田一秀穂館長とのトークショー」を開催しました。前半の講演会は「生きながら考えたこと」と題し、幼少期の満州での戦争体験を経て詩・作曲家として歩んでこられた人生における読書の意義や大切さ、価値についてお話がありました。

続く後半のトークショーでは、金田一館長とともに、詩や小説を生み出すエネルギー、創作上の工夫、苦心、作品に対する想いやヒット曲誕生のエピソードなどについて語り合いました。

TOPIC1

テーマ展示の報告

木々高太郎と  
山梨の推理小説

2019年12月6日(金)~2020年2月9日(日)

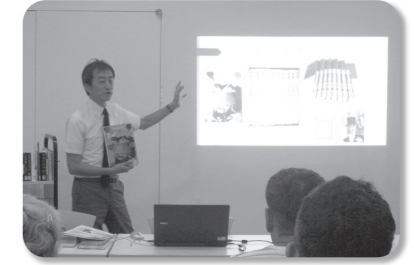


情報サテライト2で、没後50年を迎えた木々高太郎(甲府市出身)にまつわる展示を行いました。明治~戦前期、探偵小説と呼ばれていたミステリーを初めて「推理小説」と呼んだのが、木々高太郎です。本名は林藤といい、医者が本業ですが、そのかたわら小説を書き続け、『人生の阿呆』で第4回直木賞を受賞しました。今回、木々の作品に加え、山梨を舞台にした作品や山梨県出身の推理小説家の作品も展示しました。

※情報サテライト2では、5月17日(日)まで、信玄公祭りの関連展示を行っています。

TOPIC2

本好きのためのブックトーク  
かいぶらり本の玉手箱



昨年度からの新企画「各分野の専門家が語る「この一冊」と、図書館司書によるブックトーク」。分野を超えて様々な視点から本の味わい方を探ります。これまでに県立博物館の森原明廣氏、県立文学館の高室有子氏をゲストにお招きしました。今年度も開催します、ぜひ読書の楽しみを共有しましょう。

TOPIC3

貴重資料をWebで公開!  
山梨デジタルアーカイブ



山梨デジタルアーカイブで公開している画像は、図書館の職員が専用の機械で1枚1枚撮影し、編集しています。昔の山梨が見える貴重な資料がたくさん。調べものがない方もお気軽にご覧くださいね。

図書館HPトップ画面のバナーから入れます!

10/1  
11/30

本のなかに  
山梨を探せ!



やまなし読書活動促進事業の一環として、県内の書店や図書館が統一したテーマで「ブックフェア」を展開しています。10月~11月の秋期フェアでは「本の中にやまなしを探せ!」と題し、「やまなし」に関する本や、「やまなし」が隠れている本を集めてフェアを開催しました。

11/20

図書館  
たんけんツアー



県民の日恒例のイベント。普段入ることのできない地下書庫や館内をぐるっと一周しながら、図書館の使い方や貴重な資料、司書の仕事を紹介するバックヤードツアー、毛糸のクリスマスオーナメント作りのワークショップなど、多くの方に図書館を楽しんでもいただきました。

1/4・5

本の福袋&  
ジッポのおみくじ



福袋は50人弱の職員それぞれがテーマを決め、館内の約90万冊から3冊1セットでセレクトし、合計120袋を作成。当館特製のジッポのおみくじは、図書館にまつわる内容を組み込み500を本配布しました。当日はたくさんの方にご利用いただき、幸先のいいめでたい1年の幕開けとなりました。

四十年前のこと

株式会社山梨ふるさと文庫 岩崎 正吾

やまなし  
読書人

四十年前のある日、一枚の新聞広告が飛び込んできました。全国の地方出版物フェアを開催するという東京の有名デパートの広告でした。

本は子どものころから好きでしたが、当時は地方出版という言葉は一般的ではありませんでした。

本は一県一テーブルで山と積まれていました。わが山梨の本はと搜したのですが見つかりません。よくよく見ると長野と静岡と、全国でも目立つ山々の間にほんの数点、山梨の本が並んでいるだけでした。フェアの会場を出て怒りと屈辱でつぶやきました。

「ああ、山梨の本は全国最低だ。」

帰ると、すぐ出版社を作る呼びかけの文章を書いていました。

